
『朱色優陽－アケイロユウヒー』 [プロローグ]

想隆 泰気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『朱色優陽―アケイロウヒ―』 「プロローグ」

【Nコード】

N 6 6 1 3 M

【作者名】

想隆 泰気

【あらすじ】

朱色の夕陽に、ヒトは何を思っているのか。

彼女は、何を思っているのか。

——物語は未だ始まらない。

「プロローグ」

……夢を見ていた。

真っ赤な夕陽の中に佇む私。

綺麗な朱色の空。私の大好きな、斜陽色の世界。

それは夢であつたけれど、ただの夢とも違っていた。

何故ならそれは、意味不明な夢想ではなくて、確かな日々の記憶の再現だったから。

私は、綺麗な朱色が世界を支配する頃、決まって一人、誰もいない屋上へと向かう。

そこで私は、徐々に沈み行きながら、それでも最後まで輝きを失わない、眩い夕陽の凜とした姿に酔いしれるのだ。

そうして、世界が朱から濃淡に塗り替えられる頃、やはり一人で、私はひっそりとその場を後にする。

それが、日々の日課だった。

……けれど、その夢は少しだけ、それとは違った。

——だからこそ、それは夢だったのだ。

朱色の夕陽は、未だ彼方のビルの谷間に輝いていた。

いつもなら、私はその輝きから眼を逸らすようなことはしない。

だって、そこには私以外、誰もいないから。凜としたその輝きに焦がれる以外に、すべきことなんてなかったから。

けれど、夢の中の私は、そっと背後を振り返る。
そこには、一人の男の子の姿がある。

まだ高校生くらいだろうか。体格は大人の男の人と変わらないけれど、顔にはどこことなくあどけなさが残っていて、私よりも七つか八つは若いかも知れない。

私は、彼の姿がそこにあることに、何故かほっとする。夕陽を眺めている時よりも、よほど安らいだ気持ちになって、私は微笑んだ。男の子は、そんな私に、どこか照れたような、呆れたような、そんな顔で笑う。それは、不良じみた皮肉げな笑みではあったけれど、私は彼の笑顔を、いとおしいと思っていた。

私は身を寄せていた冷たい手摺りから身を離し、男の子に触れようとして――

……そこで、眼が覚めた。

窓からは、眩い白い陽光。

寝ぼけ眼で、ふとサイドテーブルに置いたうさぎの形の時計を見てみれば、午前十時を回ろうとしている。

どうやら、朝食を済ませた後で、少しばかり眠ってしまったらしい。

「……んゝゝゝっ……」

身を起こして、軽く背伸びをする。深呼吸をすると、嗅ぎ慣れた消毒液の臭いが鼻孔をくすぐった。

見渡せば、そこは清潔な白の世界。その独りきりの小さな空間が、今の私に許された唯一の城と呼べる場所だった。

「……ふう」

軽く嘆息して、私は肩の力を抜いた。

……と。瞬間、枕元に置いてあるそれに気が付いた。

「あら？　これは……」

手に取ってみれば、それは毛糸で編んだ小さなマスコット人形。
まだまだ未熟な出来映えだったけれど、制作者の一生懸命さが伝
わってくるようで、とても微笑ましかった。

「そう言えば、教えてあげる約束だったのよね……悪いことをして
しまったわ」

思わず、誰にともなく呟いていた。

——そう、私は約束していた。小児科病棟の子供達に、編み物を
教えてあげる約束だ。つい先日、ひょんなことから簡単な人形——
つまり手の中のこれ——の作り方を教えてあげたら、「もっともっ
と」とせがまれてしまったのだ。

季節柄、そろそろ毛糸を弄るのも億劫になってきているのだけれ
ど……まあ、それで子供達が笑ってくれるのなら、安いものよね？

「ふふっ……」

思わず笑みを漏らしながら、私は腰を上げた。

今日は何だか不思議な日だと思う。

寝ている間に、こんな可愛らしい贈り物を貰ってしまったことも、
朝食の後で眠り込んでしまったことも——だけど、何よりあの夢だ。

見たこともない男の子だった。夢では過去を見ることが多いと言
うから、昔の同級生の顔も片っ端から思い出してみたけど、全く覚
えがない。夢に見る理由がまるで分からなかった。

……そりゃあ、少し可愛かったし、私好みではあったかも知れな
いけれど。……いやちょっと待って。そう言うとなんだか私がアブな
いヒトのようではないデスカ。私は至ってノーマルですから。多分。

でも——仮に彼が私の妄想だったとしても、それにしては妙にリ
アルだった気がする。私はあの男の子に、まるで彼が、この世界の
どこかに本当に存在しているかのような存在を感じたのだ。

……もちろん、私の夢のことなんて私にしか分からないし、私の感覚がおかしいのかも知れないけれど。

身体よりも、頭の方がおかしくなっちゃったのかしらね？　なんて自嘲的に思いながら、私はお気に入りのピンクのスリッパを引っかけて、何の気なしに窓際へと歩を進めた。

見下ろせば、外来へとやって来る人々の姿が眼に映る。陰鬱な表情をして、辛そうに身体を引きずる人々がほとんどであるけど、中にはそうでない人々もいる。ほら、今日は何だか賑やかな二人連れが歩いてくるわ。

高校生くらいの、男の子と女の子。遠目で良く分からないけれど、男の子は頭から血を流しているみたい。女の子は、そんな彼の傷を押さえながら、それでも、さっさと歩けとばかりにぐいぐいと腕を引く。男の子は、そんな彼女が気に入らないのか、何やらぎゃーぎゃーと騒いでいた。

そんなやりとりは、本人達にすれば大ごとなのかもしれないけれど、見ている方にすれば、とても微笑ましいものに見える。

……とても平和だと、そう感じる。

その空気が、時間が、とてもいとおしいと思った。

——この平和が、世界の全てに降り注げばいい。

……暖かな毛糸の人形を胸に抱きながら、私はそう、願っていた。

「プロローグ」(後書き)

『朱色優陽―アケイロユウヒ―』1へ続く↓<http://ncode.syosetu.com/n6657m/1/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6613m/>

『朱色優陽－アケイロユウヒー』 [プロローグ]

2011年10月7日15時01分発行